

日常の生活言語をみがいてゆく國語教育

藤原與一

國語教育は、せんじつめると、國民に國語の表現力を得させることを目的とするものであるとも考へることができ。今まで、いろ／＼のことが言はれ行はれて來たが、いつも變らぬ大きな眼目は、國民に國語の表現力を得させることにある。國語の生活をして行つての表現力、つまり國語の表現力とは、國語をよく話し書き表す力である。もちろん、そのことは、よく聞きとり、また、よく讀みとることを含んでゐる。表現力とは、理解力をこめて言ふのである。理解力をほかにして、表現力を考へることはできない。理解力あつての表現力である。讀方教育と綴方教育とについて言ふならば、讀む力に相應して、綴る力が養はれる。よく讀める上に、綴り表すことができはじめて、讀むことの意義は全うされる。よく讀みとれる人は、よく言ひ表し書き表すことができよう。理解力と表現力とは、まとめて、一つの表現力として考へることができる。讀方教育や綴方教育は、この表現力の陶冶を目的としてゐるものである。話方の教育は、綴ることの教育と二つのものでない。言ひ表すことと書き表すこととは一つである。その書き表し方に關して、書方の教育がある。國語教育がいろ／＼の部門に分けて考へられるにしても、すべては、言ひ表し書き表すこと、すなはち表すことの教育になつてくる。國語の表し方の教育、すなはち表

す力を得させ、かつこれをますます強めてゆくことが、國語教育の主なねらひである。

國語の表現力とは、その人／＼の自力、たしかに本人にそなはつた力になるべきものである。かりの力といふことはあり得ない。どんなにもせよ、自分なりにものが言へ、自分なりにものが書けるといふのが自分の表現力である。かういふ表現力を持つやうになれば、その程度に應じて、人は國語の生活の自由を得るわけである。してみれば、國語教育の目的は、國語のすぐれた自由人を養成することにあるとも言へよう。人はたいいてい、自分を、ことばの生活の不自由者とは思つてゐないであらう。なるほど、一應はみな自由にもが言へてゐる。しかし、氣をつけてみれば、さほど上手には言へてゐないことが少くない。つまり、すぐれた表現と言へるやうな物言ひが、さうさうはできてゐないことが多いのである。これに氣づけば、誰でもしばらくは、物言ひのきゆうくつさをおぼえるやうにならう。書き表すことにしても同様である。ほんたうは、かういふところからはじめて、ことばの生活の自由といふことが考へられてくる。反省してみると、自分なりにものを言ひ、自分として、できるだけりつばな物言ひをするといふことは、むづかしいことである。自力をさとつて、こゝから、しつかりとした足どりで出てゆくことは、容易でない。しかし、それをやり、その自力を次第に高めるやうにすることが大切である。國語教育はそこに必要である。國語生活の自由を、どこまでも程度の高いものにするのが國語教育の目的である。

國語表現の自力は、このやうに、成長してゆくべきもの、成長させられなければならないものとすると、國語教育の基本が、どのやうなものであつてよいかは、おのづから明らかであらう。すなはち、被教育者・相手の日常の生活言語をみがいてゆく方向をとることが、國語教育の基本になる。相手の持つてゐる日常の生活言語が、その人の國語表現の自力のもとになることは、言ふまでもない。こゝをはづしては、自力のつちかひやうがない。表現力陶冶の國語教育は、當然その日常の生活言語の教育から出發する。一つの讀方教育にしても、どのやうにすぐれた國文の一篇を鑑賞させるにしたところで、讀み手の持ち前の生活言語をほかにし、それからはなれて、一べんにこの名文を味ははせることは困難であらう。よく味ははせようとすればするほど、まづその人の持ち前のことは、その人の生活してゐる言語に立脚することが必要である。人は誰にしても、自分のことばからでなくては、他のどんなよい言語文章でも、とらへやうがないのである。教育の最初の注意点が、相手の生活

言語そのものになくはならないことは、あらそはれない。じつさいの國語教室においては、かならずしも、さういふ生活言語を一々氣にしないで、しかも圓滑に授業が行はれてゐると、言はれないこともないやうであるけれども、それは、その生活言語と、教材の言語文章とのへだたりが少いために、自然にさうなつてゐるだけのことであつて、すじを正して言へば、およそどんな場合にも、つとめて相手の生活言語への注意をおこたらないやうにすることが肝要である。程度の高い、りつばなものを與へようとするほどの、これの受取り手のことばの生活の現實に對する正確な認識が必要になる。このやうな意味で、相手の日常の生活言語をみがいてゆくといふことは、國語教育の根本の方法になるのである。話方教育が重要視せられるのも、このやうなわけだからである。日常の生活言語をみがくことの根本の行き方は、話方教育にあると言つてもよい。その場合によくわかる日常語陶冶といふ方向が、じつは國語教育全般の方向になる。日常の生活言語をみがいてゆく方向において、高い程度の表現力を得させる道はない。

二

今日、國語教育にかぎらず、國民學校教育の一般は、どうかといふと、ふるはない状態にあるのではないか。進んでどしどしとやつてゆくといふ熱意と方策とに缺けてゐるところがあるのではなからうか。なにゆえに、することがないのであらう。今日の一日も、おろそかにしないでやつてゆくといふことが、なぜないのであらう。今までの國語教育には、どちらかといふと、あまりに精神的な目標が授けられすぎてゐたやうである。ことばといふ表現の世界からそれ、ことばそのものゝ獨立の世界からかけはなれて、たゞに精神を高くとなへすぎたきらひがなくてはならない。國語教育と修身公民の教育とのさかひが、わからなくもなつてゐたのである。國語そのものゝ表現の世界に遊ばせ、そこで、國語の表現力をきたへることが、やゝもすれば忘れられてゐたのである。そのやうな物の考へ方は、今日、國語教育について、やることにまよひを起させてはゐないか。もとより國語教育は、どのやうな高い精神的な目標ともつながるものであるけれども、それは多く國語の教育の歸結であつて、それがために、國語教育が單純な手段のやうにされることは、ほんたうでない。國語教育は、おのづから自己の目的を持つてゐる。

國語表現の世界にあつて、その中で國語の表現にしませ、理解力と表現力を得させるといふことが、國語教育本來の目的である。道徳上の惡事を述べた文章であるから、讀方教育にかけるのはおもしろくない、などといふことはできない。ことの善惡を、直接に、内容的に説くのが國語教育ではない。善なり惡なりが表現せられてゐるその文章の表現を、その表現のすぢを、讀み解く指導が讀方教育である。そのねらひは、讀解力を得させるのにある。讀解力すなはち國語の力である。かう考へてくると、今までの國語教育の力點のおき方に問題があつたことも批判されるし、今の國語教育のやり方についても、すぐに今やれることを見出し得るのではなからうか。何か今日に特別な、高い精神的な國語教育目標が與へられなくては、少しも動けないといふのではなくして、さつそくにやれる國語教育のしごとが、目の前に見つかるのではないかと思ふ。眞の高い目標は、また思ひのほかには手近なものである。目の先のこと、じつは大きい目標につらなつてゐるのを見つけることができるならば、國語教育は、一日もゆるがせにできないこととして着々と、推し進められるであらう。

表現力陶冶といふ大目標を、日常の生活言語をみがいてゆくこと、そこからとげられるものといふやうに、やはらげて受取つて見れば、少しもためらふことなしにやつてゆける國語教育に奮起しないではゐられないはずである。どのやうな高い目標も、まづ被教育者・相手の生きてゐることばに即應して、それをみがいてやることによつて到達するよりほかに、道はない。人は、その生活してゐることば通りにしか或はそのことばによつてしか、何事も受取りやうがない。これは動かしがたい現實である。こゝをふみはずすと、ものはみなそらごと、うそのわざになる。程度の高い、りつばなものを與へようとすれば、それがよく受取れるしせいをとらせなくてはならない。そのしせいをとらせるのが、生活言語の陶冶である。これほど日常的なしごとはない。

三

どのやうにするのが生活言語の陶冶であるか。日常の生活言語をみがいてゆくのは、どんなにすればよいのか。

一つには、生活言語の日常性をよく知らねばならない。生活言語の持ち主は無意識であるが、それでゐて、これには、その

人の命がかゝつてゐる。自覺しないほどにあたりまへの持ちふんではあるが、これをおいて、その人の思想・感情の生活はない。つまり生活言語が、生命の表現なのである。まづたく日常的であつて、しかも深いのが生活言語である。

これに對しては、悪いから直すといふことはあり得ない。不正であるからため直すといふことも、あつてはならない。よいわるいよりも、一段とよいものへといふのが、根本の考へ方になつてしかるべきである。相手のことばの生活に對して、これをさげすんだりすることなく、まづ、あるがまゝをみとめ、尊重することが必要である。地質のよい着物を着たのが禮儀正しいので、それよりも悪いものを着たのでは、禮儀の心が落ちるといふやうなことはない。人相應に、もめんの着物をよく手入見して着たのでも、すむぶんに品格は増す。人に、その着物の地質のよしあしを言つてはならない。何よりもその心ばせを見、かつ教へればよいのである。それが、持ち前の生活言語の教育になる。どうすれば一段とよくなるか、といふことを説くことがあるだけなのである。あるがまゝを、善でも悪でもないといふ出發點にする。さうして。その人ごとに、その程度以上に／＼と發展させることをはかるのである。

教室では、つねに一人／＼を相手にすることもできかねるであらう。が、大切なのは、さうする心持である。個人に當て、説くと説かないとにかゝりはりなく、指導者が、相手の一人々々の持ち前のことばと個性とをよく伸ばすやうに、心しらひをたえず加へるならば、指導される者たちは、それ／＼に受取るところがあるはずである。相手方の言語状態をけがしてかゝるか、愛情をもつて受入れ、尊重してかゝるかによつて、道は成功・不成功の大きな二手に分れる。

そだてる氣持の國語指導は、あへてむづかしいことを考へなくても、じつさいに當つて、やるべきことを求める時に、二つのことを比べ、その一つを取るといふのでよい。例へば、話を指導しようとするさいに、なまづた發音があつたとすれば、そこに、なまらな言ひ方を持出すことが、すでにそだてる教育である。みがいてゆく教育である。これとこれとは、この方がよい、との判断がはたらきさへすれば、ことはもう一步先へ進めることができる。その先はまだ、どうしたらよいかわからないといふのもよい。とにかく、今の一步を前進するのである。進めばまたその進んだ境地で、新しい判断がきつとなされる。一步でも進んだからには、進んだ所は、以前の所ではない。新境地はすなはち、前のよりも進んだ判断の生れる素地な

のである。さうして二者擇一の先をたのしむ。それを、あくまで熱心にやるのである。そこには、自然に確實な進歩がもたらされるので、たのしみである。むろん、相手を叱つたりとがめたりすることはない。これの方が一層よいぞといふものを示しては導くのである。讀方の指導にしても、讀みとりの深さ浅さは、よくその國語の實力を示すであらう。その實力とは、自分の、生活言語としてたくはへてゐる國語の自力である。生徒はつねにその自力、すなはち生活言語の出來てゐる度合に應じて讀みとり方の深さ浅さを示す。そこについて行つて、一層たけ高い受取り方をすなほに展開して見せ、本人に、その立つてゐる地盤から、十分なつとくさせるやうにすることが、親切な讀方指導である。一つ深められれば、本人はそれだけ開發されるわけで、次には、その開かれた程度のところから、それ相應の自力が出て、新しい讀みの力が發揮されることになる。要は、その生活してゐることばにつちかつて、それが開けてくるやうにしむけることである。綴方指導にしても、まづその持ち前のことばで、思ふまゝに綴らせるのである。おのれのことばをつかふことになれさせなくては、次の段階の開發のしようがない。この言ひ方は野卑だとけづり去つたり、かういふ言ひ方は教科書の言ひ方とはちがふとがめたりするのは、表現力のめばえをつみとるものであつて、正しい表現法指導とは言へない。作文といふ觀念がしばしば誤られてゐる。ないものをわざとこしらへ出すのが文章を作ることではない。作るといふのは創作すること、もつと言へば、作文は表現といふことである。綴方がきらひだとか、これの指導がが手だとかいふことは、もと／＼あつてはならないことである。必要に應じてものを言ふのと同じことが、文章を書くこと、綴ることなのである。その自然性、必然性をさとらせるのが、じつは綴方教育のことである。無理をしたり、しひられるやうにおぼえさせたりするやうなものであつてはならないのである。だからまづ自然に思ふまゝに書き表すやうにさせることが、綴方指導の第一歩なのである。さうなつて、生活言語の指導が本すぢに乗る。個人單純なくせの出た、それだけに、通りの悪い文章については、それよりもかう言ひ表すのが一層よくはないかと、さそひすゝめるのである。いけないといふことはない。かうがもつとよくはないかとの導きがあるばかりなのである。さうして行つては、書き表す力をひろげ深めさせるのである。綴つたものゝ指導では、完全な個人指導ができる。その意味において、綴方教育が、表現力陶冶の國語教育で、もつとも高いくらゐをしめるべきことも明瞭であらう。書き方の教育は、文章表現法の指導

として、廣い意味の綴方教育にふくめて考へることができる。

四

指導者として、二者擇一を行ふことは、いふまでもなく、責任のあることである。弱い指導は、相手を十分にひきつけることができない。強く指導するには、決斷がある。それだけに、指導者には、つねに、どちらの言ひ方がよいか、どう受取るのが一層深い受取り方になるのかといふやうな見識が、練磨されてゐなければならぬ。二者擇一の熱心さが、おのづから自己修養を心がけさせるであらう。責任を持つた強い判定と指導とに、不斷の修養があることは、言ふまでもない。

その修養もまた、他にたよるばかりの消極的なものではない、ひたすらにみづから求めてゆく自己修養として、こゝには自力本位のものが考へられる。さういふ道を積極的に進むことによつて、また、他から與へられるものも、おのづと多くなり、かつ、眞によくそれが自分の血肉ともなるであらう。二者擇一の精神は、自己の修養そのものについても、積極敢爲、自力開發の道を取らしめるものである。いかにたど／＼しくても、指導者のこの求める態度が、指導される者を薰化しないではおかないであらう。指導者自身の二者擇一的な自己修養のはげしい求め方が、相手の前に立つての二者擇一といふまじめな指導誘掖を産むことはもとより、さらにまた、相手そのものゝ、二者擇一といふしんけんな自己修養をすゝめることにならう。

五

目の前の事實にぶつかつて、そこで、おのれの力のおよぶかぎり、しんけんにめんみつにものを考へ、これよりはこれがよいと判定して、その時々自己の全力によつて道を切り開きながら進むといふことは、生活をたえず緊張せしめるものである。この良心があれば、できないことは何もない。國語教育をどうしたらよいのかと、まどふやうなことはない。目を見張ればすぐにやれることやるべきことが、そこによこたはつてゐる。それが、一口に言つて、日常の生活言語の陶冶なのである。どのやうな高い國語教育の目標も、この地盤につちかひ、この地盤を高めることによつてでなくては、達成のしやうがな

い。つねにどしどしとやつて行つてよいのが、この地盤をつちかふことである。手近かであつて、結局、しごとは大きい。

これを今日の世上の論議に關聯させて考へてみる。その重要なことはすぐわかる。ちかごろの國民一般の生活について、よく道義がすたれたと言はれる。いつにかゝはらず、國民道義、國際道義の大切なことは、言ふまでもなからう。ところが、道義をたゞの道義として説くならば、いたづらに修身的になつて、かへつて身につかないきらいがある。これが生活化して説かれることは、もつとも望ましい。道義のとほつた生活とは、品位・品格のそなはつた生活であらう。さて、個人の品格生活とは、だん／＼におしつめて考へてみるのに、じつさいには、品位のあることばの生活が中心をなすものといふやうに考へられないことはない。問題は、ことばの生活に歸すると見られないことはないやうである。こゝに、品格の國語教育といふことが、今日の重要事として、考へられてくるのである。この品格の國語教育が、そも／＼、きはめて日常的なものなのである。國語生活の品格といふことは、けつして遠い所にあるのではない。食べながらもを言ふことはひかへるといふつゝしみも、はや一つの品格生活である。わけもなしに、あはたゞしい、或はさう／＼しい物言ひをしたりしないといふこともまた、ことばの生活の洗練であり、洗練されて品位がうまれる。しづかに、しかも、あたゝかく相手をつゝむやうにものが言へるといふことは、すでに品格の高いことばの生活になつたものである。今日の問題、道義をおこすといふことも、このやうに、個人々人について、日常の生活言語をみがいてゆく國語教育から、自然にもたらされるであらう。生活言語の陶冶といふことは、廣いかゝはりを持つものである。

今日はまた、いはゆる國語國字問題がやかましい。それらに關しても、まづ國民全般の日常生活言語、その言語生活のじつさいをよく見なければならぬこと、この生活言語を陶冶してゆく方向が基本として必要なことは、多く言ふまでもないであらう。

大きく高くは、國語表現力の陶冶を念としながら、手近かには、毎日一刻々々のことゝして、相手方の生活言語をみがくことにとつとめ、そこから一切の國語教育をやつてゆくといふことは、我々の毎日の國語教育のしごとを、明るく、張りのあるものにしなすにはおかない。

(昭和二十一年七月十日)